

「ももたろう」から考える日本経済

大分県・大分県立大分舞鶴高等学校 2年 中馬 きらら

夏休みに行った保育園のボランティア活動で、久しぶりに「ももたろう」と再会した。絵本の時間に園児が、私に読んでほしいと持って来たのだ。「めでたし、めでたし。」と読み終わると、聞いていた園児たちは拍手をした。拍手がやんだ後、一人の女の子が私にこう言った。「よくきびだんごで鬼退治に行くよね。」と。衝撃が走った。そして、確かにという気持ちで心を満たした。どうしてこれまで思わなかったのだろう。私にとって、犬とキジとさるが桃太郎と共に鬼退治に行くのは当たり前のことで、そんなことは考えもしなかった。しかしそのことに気がついたらもう収まらない。私なら絶対にやらない。何をどう考えても、きびだんごと鬼退治は釣り合わないのだ。命を懸けて恐ろしい鬼と戦うのには不釣り合いなのだ。きびだんごには相当な価値があるに違いない。そうでもなければ、ついて行く者がいるだろうか、いやいな。家に帰ってからも、このことで頭がいっぱいになった。そして私はこの小論文を書く上で、きびだんごの価値を考え、お供となった2匹と1羽の受けるべき対価としてふさわしかったかどうか、読み解いてみることにした。

では、「『きびだんご＝今回の労働』は成り立つか」を考えていく。計算できびだんごの価値を出すため、いくつか仮定を置いておく。まず、もらったきびだんごの数だが、話の途中できびだんごを食べるシーンが、お供にしたとき、海を渡るとき、戦いの最中の三度あった。そのうちどの場合も一つずつ食べたものとする。つまり、きびだんご4個×3回＝12個のだんごが物語中で消費されたこととなる。これは、桃太郎が腰にきびだんご入りの巾着袋をつけていたことを考えると、12個程度が妥当であるため、余りはなく、この仮定はかなり現実的であるものとする。次に時間だが、この物語は1日の出来事であり、労働時間はお供になってから鬼から取り返した宝物を配り終えるまでの朝から夕方までとし、日本人の労働時間は1日平均7時間程度とされているため、今

回は午前9時から午後4時までとする。また、今回の労働は前に述べたようにお供についてから宝を配り終えるまでとし、その他描写のないものは含まないものとする。以上をまとめると、労働者である犬、キジ、さるが午前9時から午後4時まで、雇い主である桃太郎から3個のきびだんごを賃金として受け取り、鬼退治などの仕事を行った、となる。

きびだんごが対価としてふさわしいかどうか、ふさわしいものとしてきびだんごの価値を考えてみる。今回の労働は、時間で7時間であり、これは日本の平均労働時間と同じくらいである。彼らの年齢は桃太郎がまだ成人前とみられるため、20歳未満であるとする。20歳未満の正規雇用者および非正規雇用者の平均時給を仮に986円[※]とすると、986円×7時間で、今回もらえる報酬は単純計算で6,902円である。彼らがもらったきびだんごは3個なので、きびだんご一つの価値は約2,300円となる。また、物語中、きびだんごは「食えると元気が出る」とされ、戦いの最中では「千人力になる」とされており、1人が1,000人分の労力を発揮できるのであれば、だんご一つでこの程度の価値があっても不思議ではない。むしろ安いくらいである。本当に1,000人を雇おうと思った時には、690万2,000円かかり、彼らの力で合計3,000人力になったのだから、本当なら2,070万6,000円かかるため、きびだんご3個×3匹=9個(2万706円)で、3,000人力を手に入れたと考えれば、桃太郎側にとって非常によい取引であったとわかる。雇い主である桃太郎側にとって利益があったということは、逆に言うと雇われた側である犬、キジ、さるは非常に大きな損失を受けたということになる。

彼らが今回の労働で手に入れたものは、1匹あたり「きびだんご3個」、つまり6,902円と、町人や村人からの「人望」と、その後町を守ったことから「職」、の三つくらいだろうか。きびだんご3個と人望のために命を懸けて戦ったと考えると、明らかに条件の悪い労働である。つまり、今回の労働の対価として、きびだんごは全く釣り合っていない。確かに、彼らは安定した職を手に入れたじゃないかと言う人もいるだろう。しかし、この「ももたろう」という会社は完全にブラック企業だ。前に述べた賃金が労働と釣り合わないということだけでなく、注目すべきなのは労働時間である。日本では、労働基準法により午前9時から午後4時まで通して労働させることは禁止されている。桃太郎は法的

に、最低でも45分の休憩を与える必要がある。桃太郎自身も休憩なしでは身体的に厳しいため、道中休憩を入れておけばよいのだが、記述がないため実際のところはわからない。もしも休憩なしであったのならば、明らかに過重労働、違法労働である。このことも含め、この先この会社で働いていても、よい労働条件でよい賃金を得ることができるとはとても思えない。よく働く2匹と1羽の労働者を手に入れた桃太郎。そう考えると、絵本のきらきらした笑顔の裏が見えてしまったように思えて、少し怖くなった。

では、彼らはなぜそのような労働条件下でも桃太郎について行ったのだろうか。鬼を退治するという人生でなかなかすることができない経験をするのができたこと、町や村のために鬼を退治することに対するやりがいなどは、一生残り続ける大きな人生の利益であり、それらをお金で計算するのは難しい。また、共に命を懸けて戦ったかけがえのない仲間を手に入れたとも言えよう。これもお金に換算することができない。桃太郎の強く美しい意志へのあこがれや桃太郎に対する信頼からお供したと考えれば、ついて行くのにも納得がいく。

きびだんごの価値はわからない。釣り合っているかどうかはわからない。私にはきびだんごの価値は決められない。結局は、お供として戦った彼らが何を優先するかによって、この賃金が釣り合うのかというのが決まってくる。

あなたは何が手に入ることを利益とするか。お金、権力、地位が大きな価値であることは絶対に間違いない。しかし、「ももたろう」の犬、キジ、さる、である。彼らの視点で書かれた本は現在出版されていないが、彼らが欲しかったのは、経験値や、やりがい、信頼できる仲間たちだったのかもしれない。お金に換えることのできないものがあると、改めて感じる考察だった。

何かのために、誰かのために頑張れることがあるというのは幸せなことだ。お金に換えることのできない、心の中に一生残り続ける、目には見えない「何か」を大切に、何を価値があるとみるのか。自分なりの価値観を持ち、ものごとをまっすぐに見つめ、目に見える利益に走りたがる「心の鬼」に立ち向かっていく。

(注)

厚生労働省『『非正規雇用』の現状と課題』

URL <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/0000120286.pdf>

<参考資料>

- ・永岡書店『日本昔ばなしアニメ絵本5 ももたろう』、平成9年8月
- ・第一学習社『最新政治・経済資料集 2017 新版』

